

# あごら

MINI <45号>  
1980年12月10日発行 ¥100 円25

- 何でも言える●何でも書けるミニ雑誌<あごらミニ>
- 小さな<ひろば> = AGORA ・ <あごら>
- あなたの声を待ってます。みんなてつくる<あごら>

ふとしたきっかけで自分たちの持ち家を持つことになり、近郊の小さな町に移り住んで二年余り。深い意味があつて選んだ場所でもないが、転勤と縁のない私たちにはたぶん住みつく土地になる。これまでの借家住まいでは、それほど考えなかつたことだが、住みつくとなるとその土地に根を張って暮らしたいと思う。

私には地域というと、どこかわずらわしい近所づきあい、保守的な町内会といったイメージがあつた。決して拒否するわけではないのだが、近所づきあいのな束縛から自由でありたいという思いが、地域とのかわりをぎこちないものにしてきた。緊急の場合の相互扶助といったつながりを残して、積極的にかわろうともしなかつた。地域への扉を半ば閉ざし、その中で孤立し、断絶感に苦しんだ。遠方の友を求めることで心のバランスを取り戻そうとした。〈あごら〉とのかかわりも、そんな延長線上に始まつた。

近ごろ、そらし続けた視線がようやく地域に向いてきた。それは何より、子どもたちが土地になじみ、地域の友達づきあいの中で成長していく姿を身近に感じるからだと思う。実際、子どもたちを地域の生活から切り離す

## 地域の暮らしから

木野村 啓子

ことはできない。大人のように広い行動半径を持たない子どもたちには、地域の中に日常生活のすべてがあり、親密な人間関係がある。そして、子どもたちの生活はどうしようもなく地域のさまざまな条件に規定されてしまう。傍らの大人として、子どもたちが育ち合う場としての地域を見据えなければと思う。

今、私の住む地域はそれほど閉鎖的な社会ではないが、核家族単位に隔てられた壁は厚い。私たちは長時間労働の上に長い通勤時間が加算され、地域から切れている。他に活動の場を持たない女たちが、子どもとともに地域の生活にかかわりながらも、強い絆で結ばれることがない。マイホームの中では、それぞれの問題(乳幼児、お年寄りの世話、鍵っ子、病人の看護)を抱える問題家族でありながら、家族の中に閉じようとする。確かに、地域社会に、家族を越えて結び合い支え合うような関係を求めることは容易ではない。既に地域は生産の場、働く場から遠ざかり、共通の利害を共有することは稀になつた。共同的な活動の幅も限られる。しかし、地域が働く場ではなく、生活の場、子どもを育てる場であるからこそ、結び合える関係があるように思う。まずは地域でのあたり前の生活を大切にすることで、私自身を根づかせたいと思う。

### 今月のなかみ

<編集担当・あごら京都>

表紙のことは 地域の暮らしから……………	木野村啓子……………	1
「女と主婦的状況」高橋ますみ講演……………	岩佐 行子・阿部ひろ江……………	2
講演をきいて……………	梅田 勉……………	3
すてきな女たち……………	山本 純子……………	5
あごらノートから……………	柴田 冽子……………	6
柳川に来て……………	石川美智子……………	6
事務局から〈あごら京王〉例会のお知らせ、ほか……………		7
お知らせ 女のつどい・女の講座……………		8

### 〈あごら〉可能性教室

#### 「編集入門」と「電子計算機入門」

#### 受講者募集

81年の〈あごら〉の事業計画の一つに「再就職準備講座」がありますが、その一環として、1月から二つの講座を始めます。会場は「あごら読書室」(地下鉄丸の内線「新宿御苑」四谷寄り出口から20メートル。電話03-354-3941)参加ご希望の方は、ハガキでお申し込みください。両方とも先着10名限り。

#### 〔編集入門〕

- ◆期間 1月21日(水)より10回
- ◆時間 毎週水曜夜6時〜8時
- ◆資格 学歴・年齢 不問
- ◆費用 10回分3千円(非会員は8千円)
- ◆講師 斎藤千代さん

#### 〔電子計算機入門〕

- ◆電算機関係者の求人急増しています。確実な就職口を目指したい方に最適。この道20年の先輩が、心をこめて指導。
- ◆期間 1月24日(土)より15回
- ◆時間 毎週土曜朝10時〜12時
- ◆(ただし毎月第二土曜は休講)
- ◆費用 15回分1万円(非会員は3万円) 教材費・実習費別
- ◆学力 高卒以上の方
- ◆講師 小川椒子さん
- ◆申込メ切 一月十五日(木)

「明日をひらく教室」より

# 女と主婦的状况

— 東海BOCへの歩み —

講演 高橋ますみさん



十月四日（あごら京都）は、発足三周年を記念し、お解連（おんな解放連絡会京都）と共催で（あごら東海）の高橋ますみさんを京都にお招きして、主婦的状况の真っ只中から仲間たちと共に歩んできた自立への道のりを語ってもらった。彼女は、一年半ほど前（あごら東海）のメンバーと（東海BOC）を設立、具体的に経済的自立へ踏み出している。

## 主婦的状况から（あごら）へ

職場を後髪を引かれる思いで辞し、地方の通信局へ転勤になった新聞記者の夫についていった時から、主婦的状况が始まり、二・三年ごとにある転勤・育児・姑の世話、おまけに通信局も兼ねる自宅の電話番号といった役割まで背負われ、まったく身動きできないまま、家出していく姿を何度も思い描いているうちに、人生の最も充実した時期は過ぎていった。

雑誌『あごら』を知り、とりわけ、BOC（創造力の銀行）という発想にひかれ、自分も何とかしてやってみようと、それに転勤族の女たちとの連絡網を作りたいと、次の『あごら』に投稿してみた。その時は実現しなかったが、夫が名古屋へ転勤になって戻ってきた時、投稿を記憶してくれていた人がおり、二人で（あごら東海）のグループ結成を呼びかける。新聞の紹介もあり、四十人ほど集まったが、みんな内職を斡旋してもらえないのと勘違いしてきたというのである。彼女たちに、これから、そんな会を作りた

いのですと弁明せざるを得なかった心の痛手。是非とも思っていたが、齋藤千代さんに「そんな危ないことはおやめなさい。下手をすると詐欺罪で訴えられてしまう。それよりはまず勉強会から始められたら」と忠告を受け、正直、その時は拍子抜けしてしまっただけでも、そこから一歩を始め（あごら東海）はさまざまな活動の中で、次第に仲間の輪を広げていった。

## （あごら）東海BOCの設立

「主婦の再就職」アタック失敗談」の座談会をすすめていくうちに、それぞれがかなりいろいろな失敗を経験しているのがわかった。これはどうも三〇歳を過ぎた女は、雇われるという発想を変えていく必要があるのではないか。性差別反対、年齢差別反対ももちろん大切ではあるけれど、その間にも自分たちはどんな年をとってしまおう。経済的な自立にはほど遠いにしても、二人、三人と寄り集まれば何とかなるのではないか。当初の目的の創造力の銀行をやってみよう、と、話が煮詰まってきた。（あごら東海）結成から、かれこれ五年。お互いに信頼関係もでき、力量もわかるようになってきた。

昨年六月、桜井さんと二人でまず五万円ずつ出資、確認書を取り交わし、この指とまれ式に（あごら東海）のメンバーに出資を呼びかける形で（東海BOC）を結成した。一方、それ以外の人にも能力を登録してもらって、仕事がある場合、一〇%の運営資金を頂き下請け形式で仕

事をまわすようなシステムにした。最初のうちは、原稿の清書とか、テープおこしとか細々としたものだったが、活動がマスコミで紹介されたりして、そのうち、例えばデパートで開かれる「こめまつり」の企画を依頼されるなど、ポツポツと大きな仕事もくるようになった。それでも、まったくの素人で、どの程度のお金を請求してよいかわからなくて、安請け合いましたため、あとで大変な目にあったり。

こうして試行錯誤を繰り返しているうちに、もっと自分たちで仕事を作りだしていくべきではないかと考えるようになった。

## アイディア

### ファッションの集い

常々、自分の住んでいる地域で婦人問題を広げてゆきたいと思っていたのだが、なかなか受け入れてもらえない。そんな時、近所で洋裁を教えている人が、愚痴として、子育てで中断してしまっただが、再び服飾界に復帰したいと思っても、作品すら出させてもらえないし、教えた人たちが、縫子として立派にやっつけているのに自分の服を縫うばかりで収入の道がない」とこぼされた。それなら自分たちでショーをしたらと、励ましたいばかりに言ってしまった。

ところが、資金はおろか材料すらない。まずピラをまいて素材集めから始め、約半年を要し、五月十六日、ショーは実現した。服はまずふつうの女が着て歩けるもので、素材の提供者がショーのモデル

になり、お客の前で着心地を説明すると  
いったプランをたてた。

いいことに、素材の提供者に、婦人活  
動をしている人や研究者など働いている  
側の女たちが多く、主婦たちとの間に直  
接つながりのできるよい機会となった。

それに主婦の側でも、刺し子、革細工、  
袋物、そして洋裁など、これまで分断さ  
れていた互いの特技を、一つの作品に集

## 講演をきいて

### 離婚を経て

岩佐 行子

冷夏といわれたこの夏、私の人生の流  
れにひとつの節をつけた。離婚という形  
で。理由はともあれ、三〇歳を前にして、  
同じことの繰り返しに身も心も疲れ果て、  
限界だと思っていた。考えた末の結論だ  
った。

曇り空が多く、雨もよく降った北陸で、  
昼間から、子らの前でもはらはらと泣き、  
どうやって生きていけばいいかわからず、  
友達にSOSの電話をかける日が何日か  
続いた後、京都に戻った。とはいえ、我  
が家には、事情あつて戻れず、実家にホ  
ストンバッグ抱えてこがり込んだ。

離婚を決意してからの私には、もう迷  
いはなかった。私も子どもも旧姓にする  
こと、親権を取るとは、夫と何度か話

結することができたのは、意義深いこと  
だった。

ショーは大盛況のうちに終わり、その  
後も洋裁をする主婦たちのもとには消化  
しきれないほどの注文がくるようになっ  
たし、今まで趣味の域を出なかった人た  
ちにも、お金が入るようになった。

BOCの運営も決してスムーズに運ん  
だわけではないのだが、そのなかで仲間

し合い、最後には、夫は私の言い分を全  
面的に認めてくれた。以後、離婚届、学  
校転校などで、区役所・裁判所・学校・  
福祉事務所と連日駆け回り、児童扶養手  
当の申請準備をしながら、一方で職探し、  
その間に引越越しと息の詰まるような毎  
日だった。別れた夫は、事業の失敗が重  
なり、山のような借金を抱えていた。日

々借金取りからの電話が鳴り、ここ数年  
精神的に休まる日はなかった。妻である  
というだけでいろいろな催促があり、で  
も、出せるものは出し尽くしてしまっ  
て、どうしようもなかった。また責任  
の取れる額でもなかった。法律的にどう  
なのか見極めたい思いで、裁判所の無料  
相談や弁護士に聞いて回り、学んだ。そ  
して、個人の借金はたとえ夫婦であつて  
も無関係であり、自分の権利は、自ら守  
り、主張するようにと言われ納得できた。  
今まで夫の姓の下でぬくぬくと主婦の座  
に漬かってきた私は、ある意味で無責任  
だったろうし、勤めをやめて以来、夫を  
批判しながらも頼っていた。ヤクザ相手  
に身を震わせたこともあるのだから、事

が来ようと逃げまいと決めていたし、事

たちは、自信もつき、自己主張もきちん  
とできるという風に確実に変わってきた。  
主婦はダメだ、ではなくて、主婦も力を  
合わせれば、そこから次の成長ができる  
ということを学んだという点では、やは  
り、今、歩き出してよかったと思っている。

◇◇◇

「私たちは、ひとつのサンプルに過ぎ  
ない」と、ますますさんは言われる。だが、

実そう実行した。経済的には、銀行の僅か  
な残金および生命保険の解約と掻き集め  
て電話を売って一時凌いだ。持病のメニエ  
ール氏病の発作を度々起こすので母子三  
人で暮らすには心もとない。実家に身を  
寄せ、あらゆる手続きを済ませた後、子  
らに激励されながら、五年ぶりに働きに  
出た。金額の多少はともかく、給料袋を手  
にした時は、何とも言えない思いでいっ  
ぱいだった。その日、ケーキを買って子  
供たちと喜びを分かち合った。私にもど  
うにか稼げるといふ自信も湧いてきたし、  
今はアルバイトだが、働く中で目標を定  
めようと思う。

三年間、迷い、悩み、苦しんだけれど、  
一歩足を踏み出すまでが長かった。一体、  
なぜあんなに離婚を怖がったのだろうか  
と思う。多くは、世間体や子どもなこと  
などだが、近所中に事情が知れ渡れば開  
き直る以外にないし、子どもは心配した  
より、早く新しい学校、環境に慣れ、名前  
を変えたにもかかわらず、精一杯遊んで  
いる。馴染み親しんだものを壊すには勇  
気がいる。何もかも一度に噴き出した以  
上、ひとつずつ我と我が身を拾い選りね

上、ひとつずつ我と我が身を拾い選りね

このひとつの実は、彼女が専業主婦とし  
て暮らした歳月という苦い養分があつた  
からこそ、結実しつつあるのだと思わず  
にいられない。大切な私の一回きりの人  
生、空しく過ぎてゆく。その時、ますみ  
さんは一人だけで先を歩みだしてしま  
なかつた。自分と同じ思いの女たちに、  
きこえない声で、こう呼びかける。「生き  
切りましょう、一緒に。ふまとも稲垣良代」

ばならない。安住と甘えと依存を棄てた  
後、身にはね返る強さへの驚きとともに  
結婚して九年、戸籍という名のもとでく  
すぶっていたものが何であつたのかはさ  
きりわかつたように思う。もう息子二人  
以外何も残るものはない。とにかく誰に  
脅かされることなく朝まで眠れるのは有  
難い。

離婚を経験した遠く離れた女友達は、  
事あるたびに励ましてくれ、経済的にも  
援助してくれた。あからさまに本音を伝  
え合う響きには、女同士の苦しみをとも  
に乗り越えようとする気持ち伝わり、ど  
れほど救われたかしのれない。寒ければ寒  
いほど人は暖かさを感じるように、苦し  
みの中にいれば差しのべられたささやか  
な手にも心に染みる貴重な時が流れる。  
子連れの女が生きているには、あまりに多く  
の問題があるけれど、人それぞれに生き  
方はある。ましてや、やり直しのきかな  
い人生なんてあろうはずがない。子ども  
たち、命を守ってくれた両親はじめ友の  
応援のおかげでどうにか落着いたこのご  
ろ。発狂するか、母子心中とまで追いつ  
められてから数か月、別に意地を張るわ

められてから数か月、別に意地を張るわ

けもなく、あたりの風が冷たいからでもなく、さわやかな気持ちになれたのは不思議だ。以後涙はない。

高橋ますみ氏の講演を聞きながら、私は目まぐるしく去った夏を思い出していた。彼女がひたすら友を求め、経済的・精神的自立を求めて生きてきたように、私もやってみよう。決して諦めたりはしなかつたように。

ある晴れた日、子供たちと木の実や、色とりどりの木の葉を拾いながら、久しぶりにいっしょになって歓声をあげた。真っ赤になった木々を仰ぎながら季節の変わり様をしっかりと心に刻みつけた。これから先、新しく、私の人生を生きしてみよう……。

## 地域の人たちとの

### つながり

#### 阿部ひろ江

一人では解決したい問題を抱えながらも個々に分断され続けてきた女たちは、いかにして手を取り合い、力となり合えるだろう。(あごら京都)でも毎月一回集まっているが、その集まりに出ることすら困難な人もいる。またそこで交わされる真摯のやりとりが支えになり、活力となることはあっても、具体的な行動なり、実際の力となるのは難しい。

やはり力となり得るのは地域の人たちの結びつきによるものだろう。ところで私は子どもを保育所に預けて仕事をしているため、どうしても地域の人たちとの

交わりが薄くなる。そのような中で、つながりをどうやってつけていくか、ということが、ここ数年の私の課題であった。

そのようなとき、高橋さんの「主婦が歩き出すとき」を読み、一人一人の女たちとのつながりをとても大切にし、どんな小さなことにも真剣に取り組む彼女の姿を知った。また幸運にも彼女の講演が企画され、直接彼女の声を通しても聞くことができた。当日彼女は、地域の人たちとつながっていく秘訣は「身近な人の身近な問題に自分から積極的に動いていくこと」と言われた。それはやはり私に一番欠けていたところかも知れない。

自分がしんどい状況にいて今何を必要としているかは、よく見えても他人が何を必要としているか、ということまではなかなか見えない。そこまでは見る余裕もないし、なかなか見ようもしない女たちが多くかも知れない。またたとえ見えたとしても、自分のしんどい状況を押してまではなかなか動けない。けれど反面、抑圧された状況は抑圧された者だからこそよくわかる。私自身「女は差別されてる」と頭の中では思っけても、実際に自分が身動き取れない状況に置かれ、女は差別され続けてきた歴史を背負っている、と感じたのは子どもを産んでからであり、結婚制度に絡め取られている、と感じてからであった。そしてそれ以後、自分がかかわっていた障害者の問題なども共通の根を持っているのではないか、と思いはじめた。

自分が解放されるためには、まわりにいる人たちの解放なくしてはあり得ない。

自分と子どもの、ともすれば閉塞しがちな状況は、まず自分のいる場をいろいろな人たちに開放していくことよって変えていきたかった。そのような場作りを、ということでは格好の家を購入し、イメージを広げていた矢先、それまで考え続けてきた離婚問題に早々にケリがつくことになり、心ならずも家を手放してしまっ

た。そして今は娘とまた元のアパート暮らし。気分的に解放されたとはいえず、思い描いていた夢は夢のまま中断し、しばらくは放心状態であった。

とにかく今は娘と二人の生活をのびのびとしたものになりたいと思い、心を動かされるような場には娘と二人で出かけ、さまざまな人との出会いを広げていきたい。そしてなかなか身動き取れないが、今だからこそさまざまな人たちの問題に對して身を持って動けるのではないかと

### 男にとつて

#### 主婦的状況とは

#### 梅田 勉

高橋ますみさんの講演会を前に彼女についての子備知識もあり、ほく自身が彼女に期待していたのはいったい何なのかも考えていました。高橋さんの書かれた「主婦が歩き出すとき」にはとても盛りたくさんなことが書かれてあるのですが、それを読むうちに高橋さんに対するイメージが出来上がってきたのです。そして彼女に對しあなたがさを感じました。でも、それはとても満足できるものではあ

りませんでした。とても美し過ぎるので、もつとどろどろしたところがあるにちがいない、そのどろどろしたところで高橋さんがどのように歩いたかを知りたかったのです。

講演そして質疑と続き、どのように彼女が歩いたかという、その方法ではなく、歩く姿勢、人と接する姿勢にとても驚きを感じました。姑と彼女との関係の中で姑の言葉を通して過去の彼女たちの状況がわかる。そのような見方ができるようになると彼女が言ったとき、自分にとってマイナスであるはずのものをもプラスにしてしまう貧欲さを彼女に感じました。ほく自身がともすれば見失ってしまうような生きるための姿勢に、そして姑と嫁ということの深刻さゆえに驚かされました。

最後に男であるほくと主婦的状況とはいったいどんなかわりを持っているのかについて考えます。女がどの場にあっても主婦的状況から逃れられない現状は男が主婦的状況に入り込めないがゆえでもあると思うのです。男が主夫であることを許さない状況は男が一人で生きることを許さない状況でもあると思うのです。

その見返りに男はただ外へ出ることをだけ与えられているのです。



# すてきな女たち おんな解放連絡会京都

連絡先 シャンバラ ☎075-821-3579



おかいれん(「おんな解放連絡会京都」の略称)の結成については、一九七八年十二月の「ミニ」二三号で紹介しています。今回はその経過をもう一度振りかえり、それ以降のことについて報告します。

昭和五十二年十月、京都新聞紙上で、京都市社会教育総合センター構想が発表されました。当時、共同保育をやっていたメンバーの一人が、「このセンター内に予定されている婦人ホールには託児室がないので、ぜひ要求しよう」と提案しました。そしてそれにはまず、京都市の社会教育

・婦人教育の現状を知ろうと、市役所を訪れましたが、当時、京都市役所には婦人関係専門の窓口は一つもなく、あちこちたらいまわしにされ、したがって婦人行政のまとまった方針などなにも一つ聞くことができませんでした。後日、社教センター準備室と会見してわかったことは、婦人ホールはワンフロアで、応接セツトが置いてあるくらいなものということでした。(京都市の婦人会館はありません)

昭和五十三年三月、「社会教育総合センター婦人ホールを考える会(仮称)」発足。この会は、以上のような京都市のおそまつな婦人行政(対策、姿勢)に対して、「女が学ぶことの意義と必要性」の視点から、施設を直接利用するものささまざまな立場からの要求を、女たちが力を合わせて行政に突きつけ、それを具体化させていこうという目的で、未組織の小グループや、自主的自発的グループに参加を呼びかけて発足しました。この会では、国内行動計画、他都市の婦人教育行政の学習、要望書の作成・提出、市との数回の話し合い、そして、同年六月には、京都市民にこの現状を訴え、行政にも目をむけようと呼びかけ、「おそまつな婦人ホールに抗議する集会」をやっています。

この間、行政側は、五三年二月、社教センターの具体的構想発表。これについて、運営方針や詳しい内容の公開を要求したが、準備段階だからという理由で、回答はなかった。同年四月、婦人関係窓口が一本化し、「勤労者婦人対策室」となる。七月、京都市が独自の行動計画を打ち出すと発表。その中心となる婦人問題

企画推進協議会のメンバーが決定される(一五名中七人が男性)。

五三年九月、「おんな解放連絡会京都」結成。同十一月、「おかいれん」結成旗上げ集会。女から女たちへ、そして力へを合言葉に、「……ちがいを認め合い、共通点を見つけ出し、さらに新しいものを共有していくために一緒に行動してゆきたい」と思っています……と、それまでバラバラに行動していたグループの、有機的連合体として、「おかいれん」の発足を位置づけ、また規約をつくり今後の方針を確認しています。五四年二月の定例会では、今後の課題として、京都市の行動計画に積極的にかかわること。市立婦人会館(婦人センター)建設をすすめることをあげています。そして、そのための具体的な方法として、分科会(労働、教育、福祉、社会参加)を設定しました。しかし現在この分科会活動は中断しています。

五四年四月、婦人対策室は婦人対策課になりました。今後の抱負・方針を聞くための話し合いや推進協メンバーとの話し合い、十二月に出された中間報告に対する意見書の提出等々、行政にさまざまな働きかけを続けてきました。しかし、このような動きのなかで、メンバーは固定化し、あまりにも行政の対応はつまらなく、むなしさだけが増してくるという意見が出されるようになりました。

もっと広範囲の女たちの参加を求め、女自身の思想の中味を考え深めたい、そのなかから具体的行動を起こしてゆきたいという気運が高まってきます。そして、

五五年四月に「明日をひらく教室」が開講されました。女が女自身のために生きることを、一貫したテーマとして、それぞれのテーマごとに助っ人をたて、一つのテーマを二回に渡って掘り下げる方法を取っています。第一回目のテーマは自立と関係、二回目「さわやかに堂々と自己主張を」、三回目「女と主婦の状況」でした。この講座の継続は、今後の「おかいれん」の大きな柱となっていくものと思われれます。

ところで、五五年四月には、婦人対策課課長が、またまた替わりました(これで四人目)。七月には第一回京都婦人会議(京都市の行動計画をつくるための市民側の組織として、五四年十一月に発足)が開かれましたが、「おかいれん」は、この会の幹事団体の中には入れませんでした。婦人行政の場において、既成の婦人団体は、その内容はともかくとして、どこかで実権を握っています。「おかいれん」の今後の課題は、このような状況の中で、いかにその中で発言権を得、自分たちの意見を反映させていけるかということですが、またもう一つ早急に実現しなければならぬことは、京都市の行動計画の最終答申が、今月末に推進協から提出されますが、それをどのように行政が具体化するかを見張る機関(女性市民の監視機関)の設定を要求し進めていくことです。

以上述べてきたように「明日を開く教室」を継続しつつ「おかいれん」にとつて、運動体としての行政へのかかわりの視点は、当然要求されてくることのように思われます。

(文責 山本純子)

### 「あごらノート」から

三月の合宿後、村井恵子さんの提案で「あごらノート」が生まれた。メンバーの間を一冊のノートがさまざまな女たちの揺れ動く想いや願いを綴り、回っている。

### ともに働く

### 女への熱い思い

割烹、さつき、経営

柴田 冽子

夏のソビエト旅行から帰って、たくさん郵便物にまじって、あごらの封書が届いていましたが、旅行中にたまった雑務の整理に追われて、開封して「あごらノート」を手にしたときは、帰国後二週間は過ぎていました。

それからは、毎晩、毎晩、あせる気持ちを抑えつつ、ぼつぼつ読ましてもらいました。みんなほんまに、いじらしいほど一生懸命に考えながら、生活と戦ってはるんやなあと、胸が痛うなりました。

みんなが書いてはるように、私も労働時間短縮の問題は以前から考えていて、そのことを自分の企業の中で実行していく努力を今もしているところです。

大企業の事情は、私には本などで読む程度のことしか知りませんが、私のような零細企業（企業と呼べるのかどうかかわからないくらい）の水商売で、従業員の女性が、働き続けながら結婚もし、子どもを産み育てることができているのは、「小さな企業」だからこそなのです。小さい企業は、女の発想なのです。大企業の論理では、「小さいもの」を守って行くという

ことは不可能です。

学校を出てからずっと働き続けている女が、結婚後も、子どもを産み育てながら、働き続けられる、そんな職場を育てることは、女の経営者の役目と思うのです。資本の論理の中で動いている現在の社会において、男の（普通の）経営者には、そのような努力は望めないでしょう。とにかく人頼みではあきません。自分がやらなければ誰がやるのでしょうか。今すぐやらなければ、いつになったらできるのでしょうか……と。まあ、このように自分自身を励ましてはいますが、現実、私の生活は、そのかかげた理想のために、あらゆるしんどいことを、全部かかえ込むこととなります。二日酔いの朝十時ごろから活動開始で、魚の仕入れ、その日の献立を毛筆で書き、前日の伝票の値入れに、整理、商売の片腕である妹の子どもの保育園送り、そしていろいろな会合、町内会のつきあい等等。その間の時間を作らないし、月二回のデートも、しなければならぬし、銀行には、月末、五日、十五日、二十五日と、返済に走り回るという目の回るような生活です。もっと自分自身も大事にしないかと可哀想と思うが、今は、過渡期で、自分ががんばらないと現実には、企業がつぶれてしまうのです。

男の経営者のように、家庭のことはすべてやってくれるお嫁さんがいてくれたら、ずいぶん楽やろなあと思ってしまう。そこには、女の問題に目覚めた女の辛いところとやせ我慢。我ながら、貧困な生活をしているなあ——とも思うが、ともに働く女に対する熱い思いがある限り、私はつぶれない。

五歳と六歳の子を連れて、九州柳川にある柳下村塾に来て以来、七か月半が経過した。日曜・祭日も休日にならないし、夜が明けて仕事が始まり、晩になると眠るといふ切れ目のない生活の明け暮れ。京都にいたころとはまったく異なる生活のリズムで、まだ今までの時間を整理できないでいる。スーツと言葉が出てこない。連れ合いと距離を置いた上で、二人の関係・子どものこと等をどうしても考えてみた。一年の予定で来たのだが、

十年前、すぐ近くの伝習館高校の教師三名が突然処分されるという事件が起こり、その闘争運動が全国に広がって、拠点となってきた場が柳下村塾である。当時、柳川市民であり、英語塾を開いていた武田さんが、自宅を開放して場を提供し、二年後ここに託児所を開設。絶え間ない人の出入りが少しずつとだえて、闘争運動の事務所が移転するにつれ、次第に託児所を中心とした生活の場となり、運動の質も変化してきている。

## 柳川に来て

石川 美智子

共通の方向を確認し合っているので、週二回の話し合いは全員一堂に会する。私が来る少し前から「食べ物共同会」で配給する野菜は有機肥料を使って自分たちの手で、と農場建設案が決定され、今二反の借地で実験的に作物を作っている。夏の間、早朝と夕方、毎日曜、時間を作り出しては草取り作業が続いた。

熱の仕事はメンバー全員ができるだけ共に参加しようという趣旨なので、夜遅くまで連日話し合いが続き、熱に泊り込む日も多い。「食べ物共同会」を生協の柳川としてスタートさせることになり、二百五十種類もある食品類の注文表を配り、もう実際に会員に品物の配給を始めているので、その仕分け

作業、伝票整理、事務処理等の驚くほどの分量の仕事が、それぞれ自分の仕事以外に加わってくる。私がここに来てからの仕事は保母。初めの半年間は「有明」で三時間半皿洗いをしていて、現在はフルタイム。〇歳児から六歳児まで計四七人に七人の保母がかかる。（台所専従一名、保母二人が乳児七人、一人が年少児五人、二人が年中児十五人、一人が年長児十九人と担当が分かれているが、混合保育なので共通のカリキュラムも多い。私は最近、年少児の担当となつたが、年長児の学習、乳児の世話もあるので、一日のうちにはほぼ全員と付き合うことになる。自分たちで削っていく楽しさと厳しさの両極、子どもを中心に据えることの意味を、つくづく味わっている昨今である。

現在のメンバーは十四名。五組の夫婦、単身者二名、夫婦のうち片方だけの参加二名（二〇代・五〇代）子ども九名に加えて私たち親子である。それぞれ、託児所の保母、学習室の教師、「有明」といううなぎ屋、食べ物運動をしている「食べ物共同会」等、熱経営の仕事場で働いている者と、外で印刷業・会社員・高校勤務等の仕事をしている者とに分かれるが、

### (あごら京王) 例会のお知らせ

老後の問題をめぐり、有斐閣双書「老年保障論」をテキストに、学習会をすすめています。参加者にはそれぞれの老後に対する思い入れがあり、「美しく老いるためには」「コミュニケーション形態」「孤独」「生きがい」「保障制度」と話はあちらにとび、こちらにとびますが、己れの老後をしっかり受けとめたいという思いは、同じようです。

さて、次号のあごらミニは(あごら京王)が編集します。学習会の様子を少しでもお伝えできればと思っています。

次回は一月二日(六)六時半〜九時半  
福井宅(京王線仙川下車五分)

### 大盛況——だが……

#### 国連婦人の十年中間年全国会議

コペンの世界会議を受けて、「日本会議」が十月三十一日十時から、虎の門の国立教育会館で開かれました。二〇〇〇人収容のホールは、各地からの参加者で満員。鈴木首相のあいさつで華々しく(?)開幕。中山太郎・石本茂・藤田たき各氏のあいさつのおと、縫田暉子・柴田知子・関栄次(外務省)の各代表と大羽綾子顧問によるコペンハーゲン会議の報告。午後からは世界会議の映画に続き、パネル討論「男女平等を促進し、社会の発展・世界の平和を進めるために——婦人の十年後半期への提言」が行なわれ、民間婦人団体代表として、地婦連・田中里子、同盟・高島順子、婦人有権者同盟・紀平悌

子の各氏の提言のあと、原正治郎・東大教授、久保田きぬ子・東北学院大教授、室俊司・立教大教授、経済評論家・高原須美子の五氏をパネリストとして、樋口忠子さんの司会で討論がすすめられました。内容はごく表層的なもの、自分は三十三歳まで育児に専念、その後心おきなく社会活動をした」という久保田発言にフワッと拍手が起ったのにたまりかねた谷内真理子さんが、「育児は男女の共同責任だと、女性差別撤廃条約にも世界行動プログラムにも明記されているではないか」と質問したのに対しては、「個人の選択の問題」とはぐらかされました。入場者は、各地方から選ばれた代表に限られ、地方の(あごら)の会員の顔もかなり見られましたが、「わざわざ上京した時間と費用が惜しかった」という声が多かったのは残念でした。昼にはお弁当が配られました。運動の活動費の捻出に苦しむ活動家たちからは、これだけの費用があったら……というため息も洩れました。しかし、天皇・皇后臨席のもと、プリンホテルで開かれた七五年の大会よりはだいぶ進歩したという意見も、かなりありました。

### 三千人集会とデモ

#### 48団体の中間年日本大会

11月22日(土)10時30分から日比谷公会堂で開かれ、藤田たきさんの講演のあと、スライドを使った構成劇、雇用・教育・福祉・参加など、各分野にわたる状況報告と問題提起があり、大会決議、諸要求

を決議、2時30分から、各団体のスロークン入りプラカードを掲げてデモ行進、(あごら)も、48団体に初参加しました。女にも就職口を!

#### 女子学生が数寄屋橋でハンスト

九万人の女子卒業生に大企業の就職口は五千。募集時点から差別があつては、雇用の平等どころではありません。かうじて採用するところも、下宿、浪人、留年者は拒否。親もからの通勤が原則です。あまりかねた女子学生たちが、11月22日ついにハンスト。デストロイヤースタイルで命をかけて抗議しました。中間年の現実をしみじみと考えさせられたスト風景でした。

#### 会費納入についてのお願い

前号ミニで、来年からの会費を年額六千円とお知らせしましたが、ミニだけ購入の会員は三千円、海外の会費は七千円にさせていただきます。

〔編集後記〕 そのほとんどを支えられて、今回初めて「ミニ」の編集に参加。

高橋ますみさんの、私どもと同じ主婦的状况からの脱皮と、女たちとの確かな連帯に、それぞれの方から寄せられた記事の中の貴重な内容の重みを感じながらその深い心のありようを少しでも分かち合える、そんな絆をたしかめ合っている。(あごら京都)ではないかと思えます。塚崎さんを中心の一つの連帯の輪がさらに拡がり、中年から——老後まで人間全体を見つめる輪への歩みであつてほしい。

作原千恵

### 私たちをとりまく公害

—婦人民主クラブ活動年表—

編集 婦人民主クラブ公害部  
婦人民主クラブは1946年廃墟の中に生れ同時に婦人民主新聞を33年間継続して発行しています。その中から私たちの反公害運動や記事を年表としてまとめました。

300円 千140円

### 女の老い

編集 婦人民主クラブ

高齢化社会がやってくる。私たちがこの問題をどう受けとめるか。年金を現行の積立方式から賦課方式に切りかえさせよう。五万円を獲得しよう。男社会の中で女としての生きがいを探ることから出発した第一集です。

150円 千140円

### 天皇制・女

—天皇「罪位」50年を問う—

編集 婦人民主クラブ

天皇訪米の意味するもの……針生 一郎  
教育と天皇制……村田 栄一  
わたしの内なる天皇制……もろさわようこ  
天皇制差別の底辺から……宮沢志津子  
あなたの中に天皇はいないか……朴 寿南

350円 千120円

婦人民主クラブ

東京都渋谷区神宮前3-31-18 ☎(402) 3244  
振替東京8-196455

## 〈女のつどい・女の講座〉

日	時	テ	マ	会	場
12月11日(木)	18:30~	刑法改悪に反対する婦人会議 定例会 (毎週木曜日、電話しておいで下さい)		ジョキ	03-357-9565
12日(金)		「仙台地区で『あごら』を読む会」			山内宅 0222-75-4655
13日(土)	12:00~16:00	婦民反公害バザー・婦人民主クラブ			千駄ヶ谷区民会館(国電原宿駅下車)
14日(日)	14:00~	あごら浦和・例会兼忘年会			国井宅 0488-87-3680
	14:00~16:00	離婚分科会 <国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会>		ジョキ	
15日(月)	18:30~	教育分科会 <国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会>		ジョキ	
17日(水)	18:30~21:00	女大学 暮らしの中のアジア「インドネシアの日系企業と私たちの暮らし」<アジアの女たちの会>(参加費500円、連絡先03-508-7070五島)			渋谷勤労福祉会館(渋谷駅下車パルク向かい)
19日(金)	18:30~	あごら24号企画会議兼忘年会			あごら読書室 03-354-9014
20日(土)	13:30~16:30	「家庭責任をもつ男性及び女性労働者の機会均等及び平等待遇」に関するILO条約及び勧告案の検討 報告者 柴山恵美子 司会 梶谷典子 参加費 一般300円、会員200円 <婦人問題懇話会>			農林水産共済組合南青山会館
	19:30~22:30	女のパーティ コンサートと女たちの忘年会 参加費1,000円		すぺーすJORA	03-203-6022
21日(日)	13:30~	あごら京都・忘年会			シャンバラ
	14:00~17:00	小林万里子 女にうたう 前売600円、当日700円 <主催 ラジカルおばんズ 連絡先 386-6931>			すぺーすJORA
22日(月)	18:30~	鉄道の7人とともに性による仕事差別、賃金差別と闘う会 運営委		ジョキ	
26日(金)	18:30~	あごら北東京・忘年会			婦人共同法律事務所 03-985-3308
1月11日(日)	13:30~	あごら浦和・例会			浦和 コミュニティセンター
15日(木)	19:00~	「マゼンダ」ロックコンサート 1,000円 連絡先 0488-64-7676 藤田			ライブハウス屋根裏 03-464-6031
16日(金)	18:30~	あごら北東京・例会			婦人共同法律事務所
17日(土)	13:30~16:30	「性差と教育」家庭科の男女共修をすすめる会集會 講師 柏木恵子 会員200円、一般300円			婦選会館
21日(水)	18:00~20:00	あごら可能性教室「編集入門」開講			あごら読書室 03-354-9014
24日(土)	10:00~12:00	あごら可能性教室「電算機入門」開講			あごら読書室

□ あごら九州	□ あごら大阪	□ あごら京都	□ あごら東海	□ あごら神奈川	□ あごら東京	□ あごら北東京	□ あごら武蔵野	□ あごら京王	□ あごら池袋	□ あごら浦和	□ あごら柏	□ あごら札幌
福岡市西区笹丘2-4-6 小島豊子 ☎092-521-7624 ㊦810	吹田市出口町30-20-703 北垣由民子 ☎06-387-0916 ㊦564	京都市左京区北白川久保田町36-4 塚崎美和子 ☎075-791-4623 ㊦606	愛知県愛知郡東郷町和合ヶ丘1-12-9 伊藤汎美 ☎056-13-9238 ㊦470-01	川崎市多摩区東生田2-2-12 森山方 沼田千恵子 ☎044-933-9079 ㊦214	調布市仙川町3-12-32 福井浅子 ☎03-308-7871 ㊦182	豊島区東池袋1-45-11-2 金子22 婦人協同法律事務所 内村由美子 ☎985-3308 ㊦170	小平市小川町1-7-63の86 丹羽雅代 ☎042-343-6749 ㊦187	川崎市多摩区東生田2-2-12 森山方 沼田千恵子 ☎044-933-9079 ㊦214	柏市豊四季台3-1-68-212 古賀節子 ☎0471-45-6672 ㊦277	埼玉県浦和市南浦和2-19-8 国井マツ江 ☎0488-87-3680 ㊦336	札幌市中央区南25西12ニユ-藻岩503 高橋芳恵 ☎011-563-6917 ㊦064	

各地のあごら連絡先